

段落を意識して読み手に分かりやすく書く子どもの育成

刈羽村立刈羽小学校 保坂 由紀恵

1 はじめに

20年度学習指導改善調査の当校の実態を見ると、資料を選択し段落を意識して文章を書くことが課題であった。そこで、3年生の段階から、自分の思いや考えを伝え合うために、書こうとするものの中心を明確にし、資料を適切に取舍選択しながら分かりやすく表現する子の育成を目指していこうと考えた。

2 実践の概要

(1) 日常的な取組

○ 音読・読書

教科書教材や詩の音読、読書で美しく正しい日本語に多く触れることで、語彙や語感を豊かにしようと、音読・読書に取り組んだ。音読は家庭学習での音読カードの取組はもちろん、学習時間にも多く設定し、すらすらと読むことができるようになった。読書は、全校で「読書 10,000 冊」を目標に、読書を推進してきた。これにより朝読書に加え、隙間の時間を見つけては進んで読書をする児童が多く見られるようになった。読書の楽しさを感じることでできた児童も多く、最終的には全校で 19,923 冊を読んだ。

○ 日記指導

毎日の連絡帳記入時に、一言日記を書くようにした。初めは句点の数を「2つ」と決め、それ以降少しずつ増やしていった。担任や保護者のコメントが加わることで、意欲も向上し、次第に句点を指示しなくても出来事やそのときの気持ちを表現するようになった。

また、毎週末には日記を宿題とした。初めは自由に書かせていたが、途中からはテーマを設定しそのテーマに沿って作文を書くようにした。それぞれのテーマについて担任に分かりやすく伝え、担任がコメントを返すことの繰り返しにより、段落意識や相手意識が向上した。また、よりくわしく書こうと修飾語や会話文を使ったり長い文章を書いたりする児童も増えた。

(2) 国語科での授業実践

○ 単元名 「食べ物ヒミツ大百科」を作ろう

教材「すがたをかえる大豆」「食べ物はかせになろう」（光村図書 3年下）

○ 単元の目標

- ・ 中心となる語や文、段落相互の関係に注意して文章を読む。（読むこと）
- ・ 本での調べ方を知り、身近な食べ物について調べ、読み手に分かりやすく文章を書く。（書くこと）

○児童の実態

「読むこと」については、読書や音読を進んで行う児童が多い。また、場面の様子や心情を叙述に即して読み取ることを繰り返し指導してきたため、それができる児童も比較的多いが、想像で進んでいってしまう児童も数名いる。説明文は、1学期に「ありの行列」を学習した。この時、各形式段落の要点は何とか読み取ることができたが、段落相互の関係となると分からなくなってしまう児童が多かった。そこで、本単元では、「すがたをかえる大豆」で、「はじめ（問題提示と大豆の説明）－中（おいしく食べるための工夫）－終わり（考察）」という分かりやすい構成をしっかりと読み取ることで、段落相互の関係を明確にしていく。

「書くこと」については、日頃から連絡帳に「一言日記」を書いたり、日記・作文を書いたりするなど、書くことへの抵抗をなくし「相手に伝えるために楽しく書く」ことを目指してきた。少しずつ量は書けるようになってきたが、既習漢字が使えない、出来事の羅列、段落意識がないなどの課題も多い。特に段落に関しては、「句点が付くたびに段落を変える」「全く段落がない」等、極端なものも少なくなく、段落を理解していない児童もいるのが実情である。本教材「食べ物のかせになろう」では、自分が調べたい食べ物について資料を収集し選択して書くという活動に取り組む。書くときには、前教材で学習した「接続詞やつなぎ言葉、重要語句を意識して書く」ということを実践することで、段落を意識して書くことができるようになることを考える。また、「はじめ－中－終わり」の構成も学習したことを生かして書くことができるようにしていく。つまり、「読むこと」の教材で学習したことをいかし、次の「書くこと」の学習に取り組むことで、段落相互の関係を意識した文章が書けるようになるのである。それに加え学習意欲の向上を図るため、また、読むこと学ぶことに必然性を持たせるために、「食べ物ヒミツ大百科」を作成することとする。このように「目的意識・相手意識」を明確にすることで、「楽しく」かつ「分かりやすく」書くことを目指すことができると考える。

○実践の内容

〈ワークシートの工夫〉

読み手に分かりやすく表現するために、書く内容をまとめ段落を意識して書くことを目指した。そのために、ワークシートを2枚用意した。一枚は、調べたことを書き出すカード（シート①）、もう一枚は段落のまとめや構成を分かりやすくするためのもの（シート②）である。児童は、調べた内容をシート①に何枚も記入し、それをシート②に貼り段落構成を考えた。「初め－中－終わり」に分かれ、小見出しも記入させることにより、



↑ シート②
(シート②内に貼って
あるものがシート①)

いざ文章に表す時にそれをもとにスムーズに書くことができた。また、段落番号も記入したので、それをもとに段落を意識して多くの児童が書くことができた。

〈言葉を意識した読み取りと表現〉

接続語やつなぎ言葉に着目して読むことで、段落相互の関係を読み取ることができるようになる。本単元では、読み取りの力を向上させるために、これらの言葉に着目して読み取ること、読み取りのスキルも身に付けさせていくようにした。これにより、説明文の内容や段落相互の関係を読み取ることができた。そして、それを自分の表現に生かして文章を書くようにした。接続語やつなぎ言葉を用いることで、段落相互の関係を意識した文章を書くことができた。

〈確かな読みと豊かな表現のための国語辞典活用〉

語彙が少ないために確かな読み取りや豊かな表現ができない児童も少なからずいる。そのため、読書に取り組んだり国語辞典を日常的に活用したりしている。本単元でも、大豆の調理方法「いる」「ひく」「すりつぶす」などの言葉や、選択した資料の難語句があるので、国語辞典をいつも机の上に置いて活用し、意味をしっかりと理解して読み取ったり使ったりできるようにした。語彙が増えることで、読み取りや表現がより豊かなものになった。



3 研究の成果と今後の課題

- 自分だけが知っている食べ物の秘密を相手に伝えたい、読み手を驚かせたいという思いが強く、最後まで集中して意欲的に活動することができた。また、読み手を意識しての表現であるため、何度も読み返して文章を書き直す姿も見られた。伝えたいという思いが、「読み手が分かりやすい」ということを意識しての表現につながったと考えられる。
- 構成メモを書く段階で段落番号を書いて明確にし、それを原稿用紙に書くときにも段落の一字下がりのところに記入させた。これにより、ほとんどの児童が段落を正確に表すことができた。段落のない文章を書いた2名の児童に対しては、段落を一つ書いて見せてから次に進むという方法を取り、何とか自分の力で4または5段落構成の文章を書くことができ、達成感を味わうことができた。
- 初めの説明文教材での段落構成の学習が生かされ、「まず」「次に」「このほかに」「このように」等を段落の最初に用いて、段落のつながりの分かりやすい文章を書くことができた。特に、「このように」はまとめている時に使われているということが分かり、他の説明文の読み取りにも生かされている。
- 一言日記やテーマ作文などの取組で、書くことへの抵抗はなくなった。また、1月には「たから物をさがしに」（光村図書3年下）という物語を創作する教材があった。そこでは、構想メモに基づいて物語を書いたが、読み手を意識し、会話文や様子を表す言葉

を多く用いたり段落をきちんと分けたりして、想像豊かに楽しんで物語を書く姿が見られた。一人平均原稿用紙7枚の創作物語（最高原稿用紙13枚）を書き、児童自身も「書くことが楽しい」「自分はこんなに書けた」という思いが強くなった。

- 本を調べてカードに必要な情報をまとめたが、その取り出しがなかなかうまくいかず時間がかかった。要約する力の不足を感じた。今後も繰り返し指導を続けていく必要がある。



↑ 児童の作文の一部